

第五章 民俗事象における祭りの木 —— 樹木と名づけの民俗

ここまで、削りかけを成り立たせる背景となった人々と樹木との具体的な関わりの在り方をみてきたが、そうした実質的な関わりの一方で、人々はその間に様々な意味を見出し、表象を重ねることで、実用と観念とが入り混じった関わりの世界を築いてきた。野本寛一は次のように述べる。

「人と動物の共生民俗は、即物的・生物学的な関係にとどまることなく、特に人の側において、心意的伝承が発生しやすく、それは、伝説や信仰にまで発展することがある。そこに、民俗の重みがあるとも言えよう」〔野本 二〇〇八（一九九四）二三〕

そうした「心意」は観念的、感覚的な領域に属し、往々にして言語化されないため、客観的に論じることの難しい分野である。そこで本稿では、伝説や信仰などをはじめとする具体的な民俗事象を人々の心意の表象と捉え、その検討を通して人々が樹木と取り結んできた、より観念的な関わりの在り方を描いてみたい。

様々な民俗事象は緻密に編み組まれた心意の表象であったと同時に、その意味体系を保持し、伝承するための装置でもあったはずである。樹木に付随する禁忌伝承などはわかりやすい。たとえばヌルデは死者の杖や護摩木として用いられてきたことが古くから知られており、とくに東日本を中心に日常にこれを忌む地域がみられる。また本章でも触れるように、ミズキも山の神信仰との関わりで地域によっては日常の用を禁じられる。紀伊半島東岸部で用いられるアカメガシワなども、同地では材は年忌の卒塔婆に、葉柄は盆の箸に使われるなど、非日常性を帯びた木である¹。樹木ひとつひとつに付随するこうした禁忌伝承や用途の限定は、人々の樹木認識の体系を表象するものであり、またその意味づけをくりかえし再認させるための——すなわち、祭りの木として選ばせ続けるための——装置、しくみともいえるのである。

こうした民俗事象のなかから本章で取りあげるのは、名づけという行為である。

名づけることは、認識することそのものであった。市村弘正はそれを端的に語る〔市村

二〇〇六 一三四～一三五]。

「名づけるとは、物事を創造または生成させる行為であり、そのようにして誕生した物事の認識そのものであった…(中略)…人間は名前によって、連続体としてある世界に切れ目を入れ対象を区切り、相互に分離することを通じて事物を生成させ、それぞれの名前を組織化することによって事象を理解する…(中略)…そこに成立する名前の体系は、人間とその物とのあいだに数限りなく繰り返されたであろう試験(試煉)を含む交渉を背負っているものであり、それは『生きられる』空間が創造されたということであった」

本章では、樹木に付与された名前やその体系の検討を通して、樹木に対する人々の言外の認識、またその体系に触れ、人々と樹木との関わりの在り方——すなわち削りかけの生みだされた背景——のもうひとつの側面を描き、そのなかで、特定の樹木がいかに意味づけられ、祭りの木として選ばれ続けてきたのかを考察する。

第一節 認識の表出としての地域名称

樹木の名前にはいわゆる共通語である標準和名と、方言である地域名称がある。本章でははじめに、ヌルデ、ミズキ、イヌビワの三つの樹木に関わる地域名称の検討を通して、樹木に対する認識がどのような形で名称に反映するのかを検討し、それが樹木選択を意識的・無意識的に促すひとつの装置であったことを論じる。次いで第二・三節では、名づけることの背景にある人と樹木との関わりの在りかたを検討する。削りかけに用いられる樹種群は、地域名称が豊かなことが特徴として挙げるができる。そこで、地域名称の乏しい樹種群との比較を通して、どういった人／樹木の関係において命名という行為がなされるのかを検討する。それは、名づけという行為の背景に、どういった人と樹木との関わりの在り方をみることができるのか、あるいはどういった関わり方をする樹木を、祭りに用いる木として選んでいるのかを検証することでもある。

主な資料とするのは『日本植物方言集成』[八坂書房 二〇〇一]である。『方言集成』は、日本に生育する種子植物、シダ植物、コケ類、キノコ類、藻類、主な作物類、野菜、果物、園芸植物、約二千種について、地域ごとの名称、四万語ばかりを収録している。採

集には当然偏りもあることとは思われるが、植物の地域名称に関してはもっとも網羅的な辞典であり、凡その傾向を把握するにはじゅうぶんな数の集積がなされているとあってよいだろう。本章では『集成』に報告されたものに、筆者の調査や自治体史等の収集作業のなかで採集したあらたな資料もつけ加えながら検討していきたい。なお、本章でとくに取りあげるヌルデ、ミズキ、イヌビワについては、地域名称一覧を表 a～c にまとめている。

(1) いくつかの地域名称——ヌルデ、ミズキ、イヌビワ

はじめに、実際にどういった地域名称がつけられているのか、その背景にある習俗との関わりも含めていくつかの具体例を確認しておきたい。ここでは東日本からヌルデとミズキの二例、西日本からイヌビワを取りあげる。その後、樹木に対する認識がどのような形で名称に表わされているのかを検討したい。

① ヌルデの地域名称

まずヌルデに関して『日本植物方言集成』に報告されている地域名称のいくつかの系統を確認しておきたい(表 a)。ヌルデの地域名称については渡邊三四一も詳しく論じており、参考になる〔渡邊 二〇〇七 一七～二〇〕。以下、渡邊の研究を補足しながらヌルデ名称の主な系統を確認しておきたい。

標準和名であるヌルデは、樹皮を傷つけると出てくる白い樹液に由来するとされ、渡邊が引いている通り、『日本国語大辞典』には「塗手」「濡手」「滑出」「粘出」などの語源説が紹介されており、この樹液を物に塗ったことが由来ともされる〔平井 一九九六 三九五〕。この系統の名称はヌルデッポー、ノデンポー、ノリデ、ユリデなど、少しずつ形を変えながら全国に及んでいる。フシノキ系名称も全国にみられる。この名は、ヌルデの若芽や若葉に生じるコブ状の虫癭ちゅうえいから採れる五倍子ごばいしに由来するもので、五倍子は染料や薬用、またお歯黒の原料などとしても重用された。有用部位である五倍子の名が、そのまま樹木名になった例である。

表a ヌルデの地域名称

	東北	信越	関東	中部	近畿	中国	四国	九州沖縄
ヌルデ系	ぬてっぼ(宮)	ぬりて(佐渡)	ぬで(千)	ぬで(岐)	ぬりだ(滋・兵)	ぬりだ(鳥・岡・広)	ゆりて(高・愛)	
	ぬでっぼ(宮)	ぬりて(佐渡)	ぬうでんぼ(栃)	ぬでっぼ(岐)	ぬりて(兵)	ぬるだ(鳥)	ゆるでん(愛)	
	ぬるて(青)	ぬりて(佐渡)	ぬでんぼ(茨)	ぬでっぼ(岐)	ゆりだ(兵)	のりだ(鳥)		
	ぬるで(宮)	ぬるで(新・長)	ぬでんぼ(栃)	ぬでのき(愛)	ゆりら(兵)	のるで(岡)		
	ので(山)	ぬるでんぼ(新)	ぬりて(茨・郡・千・東)	ぬりて(山)	ゆるだ(兵)	ゆるだ(鳥)		
	のてっぼ(福)	ねりて(新)	ぬりて(茨・郡・千・東)	ぬでのき(愛)				
	のでっぼ(山)	のっだ(富)	ぬりて(新)	ぬでのき(愛)				
	のでっぼ(宮)	のてっぼ(新)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでっぼ(宮)	のてっぼ(新)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでっぼ(宮・山・福)	のりて(新・長)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでぬき(山)	のりて(新・長)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでほ(宮・福)	のりて(新)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでほ(宮)	のるで(長)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
	のでほ(福)	のるで(新)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)				
のてんつき(山)	ゆりだ(福)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)					
のんでぬき(山)	ゆりて(佐渡)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)					
	ゆりて(佐渡)	ぬりて(新)	ぬりだ(岐)					
フシ系	ふし(青・岩)	ふし(福)	しんぶし(茨)	ふし(岐)	ふし(三・滋・兵・奈・和)	ごばいし(岡) ^{※1}	ふし(徳・高)	ふし(鹿)
	ふしき(秋)	ふしのき(新・長)	ふしのき(東)	ふしつく(静)	ふしのき(三・京)	ふし(鳥・岡・広・山)	ふしぎ(徳・香・愛)	ふし(長・熊)
	ふしぎ(岩)		みんぶし(茨)	ふしのき(愛)		ふしぎ(鳥)	ふしつく(高・愛)	
	ふしのき(青・秋)		みんぼし(茨)	みんぶし(山)		ふしつき(山)	ふしのき(徳・香・愛・高)	ふしのき(福・熊・大・宮・鹿)
	ふすのき(岩)		みんぼしのき(茨)	めんぶし(山)		ふしのき(鳥・岡・広・山)		
カツノキ	かじのき(岩)	かち(富)	かずのき(茨・埼)	かつおぎ(静)				
	かずのき(岩・宮・福)	かつき(富・石・福)	かちのき(神)	かつき(岐)				
	かちのき(岩・山・宮)	かつぎ(石)	かつつぼ(茨)	かつき(山・静)				
	かつぎ(岩・秋)	かつつき(石)	かつつぼ(茨)					
	かつぬき(宮・山)	かつつき(石)	かつのき(茨・群・埼・東・神)					
	かつのき(岩・宮・山・福)	かつのき(新・富・石・福)	かつほく(群)					
	かつほく(新)	かつんぼ(千・東・神)						
オツカド系		おつかど(長)	かつんぼ(埼・東・神)	おつかど(山)				
		おつかど(長)	おつかど(群・埼)					
その他 ツクリモノ		あほ(長)	おつかど(群・埼)	あーぼ(静)				このみやのき(宮)
		あわぼ(長)	おつかど(群・埼)	あーぼのき(静)				
		こしもんぎ(新)	おつかど(群・埼)	おほんだれのき(山)				
		ほだる(長)	おつかど(群・埼)	だいのこ(静)				
	ほんだる(長)	おつかど(群・埼)	でやあこのき(静)					
		おつかど(群・埼)	ほうだれのき(愛)					

ゴマギ系	こまぎ(青・岩) こまぎ(青・岩・秋) こまぎ(青・岩・秋) こまぞ(秋) こまのき(岩) こまんぞー(秋)	こまぎ(新) こまぎ(新)	こまぎ(群)						
シオミ・シヨツバ系	しよんじき(山) しよんちき(山) しよんつき(山)	しよーで(長) しよーのみ(長) しよーのみのき(長) すのみ(長)	しおからのき(群) しよーから(千) しよっぱみ(崎) しよっぺしよっぺのき(千)	しおから(東) しおからかせぎ(千) しおからのき(千) しおなぬ(千) しおのき(千)	しおから(岡) しおのき(岡)				
ズイノキ系 ^{※2}	じーきしば(秋)		あばぎ(千)						
アバギ系 ^{※3}	じーのきしば(秋) すぬき(山) ずのき(山)		あばんき(千) あばんぎ(千)						
カブレ系 マケギ系			かふれ(愛) かふれき(静) かふれつき(静) かふれのき(静)	かふれ(岡) まげのき(香)					
キタス系				きたうす(島) きたすき(山) きたすぎ(山・広) きたらす(島) ひたいすぎ(広)	きたうす(島) きたすき(山) きたらす(山・広) きたらす(島) ひたいすぎ(広)				きたす(大・宮)
その他の樹木	やまうるし(青)	うるし(長) やまうるし(石)	うるしのき(静) やまうるし(岐) はげ(静) はんじ(静)	うるしのき(岡) ねぶ(山) ねぶのき(山)				やまはげ(高)	
その他		すいすい(長) ろーぼく(福) ^{※4}	おかさり(山) おじゅーごんち(岐) さいはいのき(山)	あかべそ(京)	えびのき(山) つおと(島) てんびん(山) ひぐらし(山)			おいわず(香) かしわ(高) からぎ(香)	はぐろのき(鹿) ^{※6} はしりぎ(長)

のうたち太字の地域はヌルデを削りかけに用いる地域

【註】※1 五倍子(フシ) ※2 随に対する認識から? ※3 吸水しにくいため浮子(アバ)に用いられる ※4 蝶木? ※5 イロリにくべるとオキが撥ねる。股を開いて座るとオキが飛んで危険なため、自然に行儀がよくなることから ※6 園黒に用いるため?

【参考文献】八坂書房2001『日本植物方言集成』／旭町誌編集研究会1981『旭町誌』通史編／阿南町誌編集委員会1987『阿南町誌』下巻／宇都宮貞子1982『植物と民俗』岩崎美術社／香川県1985『香川県史』14巻／神野善治1996『人形道祖神』白水社／北設楽郡史編集委員会1967『北設楽郡史』民俗資料編／串原村役場1968『串原村誌』／大合村誌編集委員会1965『下久保ダム水没地の民俗』／同前1973『大合村誌』／群馬県教育委員会1977『大間々町の民俗』／群馬県立歴史博物館1995『上州の小正月ツクリモノ』／白鳥町史編集委員会1985『白鳥町史』／上毛民俗の会1951『上野村の民俗』／高根沢町史編さん委員会2003『高根沢町史』民俗編／東洋大学民俗研究会1973『粕尾の民俗』／栃木県立郷土博物館1982『秋山の民俗』／栃原昭雄1978『埼玉県秩父地方の小正月』／小正月行事とモノツクリ』日本常民文化研究所／中川雄太郎1969『村の民俗』水稲社／長野県木曾郡桶川村教育委員会1972『木曾桶川村の民俗』／長野県史刊行会民俗資料調査委員会1980『長野県南佐久郡八千穂村 佐口民俗誌稿』／長野県南佐久郡民俗誌稿』／永松敦1991『椎葉の小正月』『山の歳事暦』山村民俗の会／新潟県教育委員会1982『越佐の小正月行事』／根羽村誌編集委員会1993『根羽村誌』下巻／芳賀町史編さん委員会2002『芳賀町史』通史編 民俗／半田町誌出版委員会1981『半田町誌』下巻／日之影町史』九／平井信二1996『木の百科』

以上は全国に分布する名称であるが、渡邊が「中部以北の東日本だけに集中的分布をみせる方言群」として挙げているのがカツノキ系、ゴマギ系などの名称である。**カツノキ**は一般に「勝軍木」と表記され、その語源としては『日本書紀』において聖徳太子がヌルデで四天王像を彫刻し、物部討伐に勝利したという故事が引かれることが多い。渡邊も指摘する通り、「古くからヌルデにある種の呪力を認め、いわば『聖木』としての価値観を抱いていた」らしいことがわかる。こうした語源説を採らない地域でも、「カツ」という語感を縁起のよいものとし、裁判ごとのある前にはカツノキで作った箸で食事をするなどという伝承が聞かれる場合が少なくない。**ゴマギ**系の名称は、密教の加持祈祷に用いられる護摩木に用いられたことからつけられたものと考えられ、燃やすとパチパチ爆ぜる性質——日常においては敬遠され、あるいは役立たずの所以のように語られる——が、これにふさわしいものと認められたようである。このほか**シオノミ**、**ショツパ**系の名称も東日本に多いが、これは果実の表面に塩辛い白粉（酸性りんご酸カルシウム）がつくことに拠る²。以上のほか、オッカド、アワボ、ダイノコ、ホンダルなど、**ツクリモノの名を冠した名前**が広くみられることも特筆すべきである。

西日本にのみみられる名称としては、**マケギ**系、**カブレ**系など、ウルシ科のヌルデならではの命名があるが、渡邊も指摘するとおり、これらは「ヌルデの負の側面を表現」した名称といえる。**キタス**系もやはり西日本のみみられる名称で、倉田悟は、ニワトコの地域名称（タズ系、近畿から九州までみられる）との対比から命名されたものとみている〔倉田 一九六三〕。

さて、以上の名称のうちヌルデを削りかけに用いる地域でのヌルデ呼称は、中部以東ではヌルデ系、カツノキ系、それにアワボ、ダイノコなどのツクリモノ系名称が主流である。ゴマギ系、シオノミ系名称は管見の限りみられず³、またフシノキ系名称も多くない。一方西日本ではそもそも事例自体が少ないが、そのうちほとんどはフシノキ系名称で呼ばれている。

② ミズキの地域名称

和名「ミズキ」の地域名称のうち、もっとも広くみられるのが**ミズキ系**、**ミズクサ系**など、ミズを冠した名である（表 b）。これは春先に木を伐ると滴るように樹液が出ることからつけられた名と考えられ、ミズクサのクサは、草のように伸びがよいためについたとされる〔平井 一九九六 四九八〕。こうした「水」の性への認識は、しばしば呪術的な意味あいを帯びる⁴。火除のためにミズキを棟木に縛りつけておいたり屋敷内に植えるなどの行為はそうした認識が表出したものと考えられ⁵、東日本の一帯で確認できる習俗である。もっともこれを屋敷に植えてはならぬという地域もあり、山形県南陽市赤湯では『家敷にミズキを植えると、主人が涙を流す様な悲運が到来するゾ』と、語り継がれ⁶てきたという〔後藤 一九八七 四五〕。涙のように流れ出る樹液に対する認識が、忌避の感情に転化した例と考えられる⁶。

ミズキの枝の赤さを表わした「**アカキ**」「**アカシバ**」などの名も東日本を中心にみられるが、ミズキの小枝が色づくのは冬から春にかけてであるので、この時期の印象によって命名された名であることがわかる。この「赤い木」を意味する名称が、**ダンゴギ**にミズキを用いる（後述）ことの多い東日本を中心にみられることは、小正月、すなわち枝の赤い冬季にとくにこれを用いるという行動様式が、赤に対する認識をより一層強め、結果としてひとつの命名の契機になったことを思わせる。

さて、以上の名づけはミズキの生態的特徴の観察に基づく命名であるが、**ダンゴギ系**や**カギ系**名称のように、用途によって命名される場合もある。**ダンゴギ系**の名称は、小正月に飾る**ダンゴギ**、**マユダマ**などと呼ばれる飾りものに由来する。東日本、とくに東北地方ではこの飾りものには圧倒的にミズキが用いられるが、それが如実に現われたのがこれらの名称というわけである。いっぽう**カギ系**名称は、子どもがミズキの股になった部分で引っ張りあいをする遊びと関わる⁷。このカギの遊びが元は単なる子どもの遊戯でなかったことは、**カギノキ**、**カギベロ**などの名称や、東北地方ではこの木が山の神の木とされる伝承とあわせて考えれば、ほぼ明白であろう。ミズキは、とくに東北の山間部においては、そ

表b ミズキの地域名称

	東北	信越	関東	中部	近畿	中国	四国	九州沖縄	
カギ系	かぎこしば(秋) かぎしば(秋) かぎしば(秋) かぎちよ(青・岩) かぎっこ(青・秋) かぎのき(秋) かぎびこ(秋) ^{※2} かぎびろ(青) ^{※3} かぎふかけ(秋) かげばり(青) かげびき(秋) かげびき(秋)	かぎつびき(長) かぎんこのき(新) かんだい(新) かんだいのき(新)	かぎ一このき(神) かぎさまのき(栃) かぎこのき(栃・神・山) かぎつちよのき(東) かぎつびき(茨) かぎんこ(群) かぎんちよのき(群) かぎんどう(群) かぎんぼ(群) かぎんぼう(群) かぎんま(群) かつきんぼ(群)	だんごばら(山) だんごすき(栃) だんごのき(茨・栃)	だんご(三)				
ダンゴ・ マユタマ モチバナ 系	だんごぬき(山) だんごのき(岩・宮・山・ 畑) ^{※1} だんごぼく(青) なしならぎ(山) ^{※1}	だんごき(新) だんごぎ(新) だんごのき(新・長)	だんごすき(群) かつきんぼ(群)	だんごばら(山)					
その他 ツクリモノ	あいたまのき(青) まいたまのき(青) まいたまのき(青) まいだまのき(青・宮) まえたまのき(宮) まゆぎ(岩)	まいだのき(新) まいだまのき(新) めーだまのき(長)	もちのき(茨)						
ミズキ系	はなのき(福) みずき(岩) みずぬき(宮)	いわいぎ(新) みずき(新・富) みずのき(石・福・長)	はなのき(群) みずき(群・崎) みずつき(崎)	みずつき(山)	みずき(三・奈) みずのき(三)	みずし(広)		みじし(宮) みずき(鹿)	
ミズキ系 (続き)	みずのき(岩・宮・福) みんずき(山)		みずのき(茨・栃)					みずし(福・佐・長・熊・ 宮・大・鹿) みずて(鹿) みつし(鹿) みつずし(鹿) みつし(鹿) みつてのき(鹿) みつてのき(鹿)	
ミズクサ ミズブサ	みじさ(岩・宮) みずくさ(岩・宮・福) みずしや(岩) みずふさ(岩・宮) みずぶさ(岩) みちひさ(宮)	みずくさ(新・福・長) みずぐさ(新) みずぶさ(新・長)	みずーさ(干) みずくさ(崎・群・干・東・ 神) みずぐさ(栃・群・干) みずさ(干) みずふさ(崎・干)	みずくさ(山・岐・静) みずぐさ(山) みずぶさ(静) みずぶさ(山・岐・静・愛)		みずかす(島)			

みつふさ(宮)	みずぶさ(群・崎・干)	あおみずき(三)	かさみずき(岡)	あかみず(熊本)
～ミズキ	みぞーさ(干) みつぐさ(柄)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	かさみずき(岡) からかさみずき(鳥) くそみずき(岡) しろみずき(山) とりでみずき(山)	あかみず(熊本) あかみずし(福・大・宮) じゆるみじゆす(福) しろみずし(大・宮・熊鹿) しろみつて(鹿) たにみずし(大)
アカ～	あかほや(群) あけぼ(群)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あかほ(高) あかほ(高)	*あかみず(熊本) *あかみずし(福・大・宮)
ハンカ系 ※2	あかいき(長) あかめのき(新) あかんぼー(長) あかんぼや(長)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高)	あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高)
クルマ系	だんだん(神)※3 だんだんみずくさ(神)※3	はしかのき(滋) みずはしか(和) みずはしか(三・和)	あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高)	あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高) あかほ(高)
スモウト リ系 ※4	すもーとりのき(新) すもーとりのき(神)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみず(熊本) あおみずし(福・大・宮) じゆるみじゆす(福) しろみずし(大・宮・熊鹿) しろみつて(鹿) たにみずし(大)
その他	とりあし(静)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみず(熊本) あおみずし(福・大・宮) じゆるみじゆす(福) しろみずし(大・宮・熊鹿) しろみつて(鹿) たにみずし(大)
不明	かたつげ(崎) ぼっばく(神) ぼっばこ(神)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみずき(三) からかさみずき(京・兵) こうだらみずき(三) こうだれみずき(三) ごーたれみずき(三) しろみずき(山)	あおみず(熊本) あおみずし(福・大・宮) じゆるみじゆす(福) しろみずし(大・宮・熊鹿) しろみつて(鹿) たにみずし(大)

のうち太字の地域はミズキを削りかけに用いる地域。地域名称の前の「*」は、別のカテゴリと重複しており、既出のもの

【註】※1 庄内の方言。当地ではダンゴ木を飾る事をナシダンゴを成らすという(筆者調査) ※2 季語「麻疹木」 ※3 中川1990、幹から枝が一年ずつ車輪状に出る性質からついたとされる ※4 木の股になった部分で引きあったから？

【参考文献】八坂書房2001『日本植物方言集成』／青森県2003『青森県史』自然編／片品村史編纂委員会1963『片品村史』／倉田悟1975『樹木民俗誌』／群馬県教育委員会1981『宮城村の民俗』／群馬県立歴史博物館1995『上州の小正月ツクリモノ』／鴻巣市史編纂委員会1995『鴻巣市史』／国学院大学民俗学研究会1974『民俗探訪』／子持村誌編さん室1987『子持村誌』下巻／中川重年1990『利用面から見た樹木特性のレベル別区分の必要性』『木と民具』日本民俗学会／新潟県教育委員会1982『越佐の小正月行事』

の樹皮の赤いことが山の神がお産に用いたためなどと説明され、日常の用を禁じる地域が広い〔たとえば千葉 一九七一 一六六ほか〕。山の神（あるいはサイノカミ）とカギカケ伝承の関わりについてもすでにⅠ－四章で触れた通りであり、そもそもカギという形状が一個の呪具となりえた。それは、ベロベロと呼ばれる先端が折れ曲がったカギ状の木や草を用いて占いをする習俗にも連なっているものと考えられ、カギという名称の背後に、こうした信仰の諸相が広がっていることがわかる。以上の名称はいずれも削りかけにミズキを用いる地域で用いられているものである。

一方、西日本をはじめ石川や富山、神奈川など、削りかけやダンゴギをはじめとするツクリモノにミズキをあまり用いない地域に多く分布するのは、ミズキ系の名称に接頭語をつけて「～ミズキ」とする例である。カラカサミズキ、ダンダンミズキなどの名称は、枝が車軸状に段々についた樹形に由来するもの、また、シロミズキ、アオミズキなどは対比からつけられた名称で、たとえばシロミズキはクマノミズキに比べて材が白いことからの名称である〔中川 一九八四 b 三、一九九〇 一一三〕。これは近縁の（あるいは類似する）別の樹木が「本物」との認識があり、それとの差異が名称化されたものと考えられることができる。たとえば、アオミズキ、ゴウダラミズキなどの地域名称のある三重県をはじめ、鳥取、山口、高知、徳島、福岡などではクマノミズキが「ホシミズキ」「ホシミジュス」などと呼ばれており、こちらが「本物」として認識されていることがわかる。このほか、ミズキを祝い木として用いない地域（近畿以西）でみられる名称としてハシカ系の名がある。ミズキを表わす季語の「麻疹木」〔角川学芸出版 二〇〇六 五一九〕と関わりがあると思われ、枝の鮮やかな紅色からついた名称と推測されるが、それが疾病の名前で表わされているのはあまり肯定的な表現とはいえないだろう。

③ イヌビワの地域名称

イヌビワは樹木自体の分布域は関東以西に限られるにも関わらず、削りかけ材の樹種のうちではもっとも多くの地域名称が報告されている（表 c）。タブ・イタブ系、イヌビワ系、

チチ系、ほかの動植物名を冠した名称の一群、アマ～のように実の甘さを表現したもの、～ブテ、～ブタエなどの系統、そのほか筆者の知識においては由来不明なものも多数あった。

このうち九州を中心に広く分布するのが**タブ**系の名称で、タブ、タブノキのほか、コタブ、カワタブなどの名称が報告されている。この「タブ」の名の背景には人と樹木との興味深い関わりをみることができる。通常タブといえ、クスノキ科の和名タブノキを指すが、これは大木になる常緑樹で、小高木あるいは低木で落葉するイヌビワとはまったく似ていない。しかしたとえば種子島などでは、いわゆるタブノキ（クスノキ科）も、イヌビワも共にタブと呼ぶのである（向井睦雄さん、大正一四年うまれ）。クスノキ科のタブノキは信仰の木としてよく知られている。折口信夫もタブに深い関心を寄せた民俗学者のひとりであるが、「海から来る神と、海ぎはの崖に聳える神木との関係」について述べており、タブが「常世神の漂着地と、其将来したと考へられる神木」であることを示唆している〔折口 一九九七 四八三～四八四、以上タブについて詳しくは今石 二〇〇五 b・二〇〇六 b〕。このタブの名の由来については諸説あるが、そのなかに「^{たま}壺の木」とする説がある〔たとえば倉田 一九七五 一〇四〕。イヌビワを削りかけに用いる地域では、この木はタブノキ、イタブ、カワタブなど、タブ系名称で呼ばれることが多い。タブの名がイヌビワにもつけられたことの意味は、これが祭りの木として用いられるという事実と併せて考える必要があるだろう。

このほかの地域にみられる**チチ**系の名称は、イヌビワの根や茎、葉、果実を傷つけると白い乳汁が出ることからつけられた名称と考えられる。同系統の名称は関東から九州まで分布しており、これがイヌビワの大きな特徴として認識されていたことがわかる。**ほかの植物や動物の名を冠した名称**が多いのもイヌビワの特徴である。表にあるように、ビワ、イチジク、モモ、クルミなどを含む名称は、イヌビワの実をそれらに比して名づけたもの、ホオズキは子供の遊びから命名されたものと考えられている（後述）。動物では、イヌ、ウシ、カラス、サルなどが冠せられるが、特にイヌとウシが多い。イヌについては、これが

表c イヌビワの地域名称

	関東	中部	近畿	中国	四国	九州沖縄
イタビ系			いたっぼ(和) いたっぼ一(大) いたび(兵) いたぶ(三・和) いたんぼ(和)		いたぶ(高) いぬいたぶ(高) くえいたぶ(高) やまいたぶ(高)	いたつのき(長) いたび(長) いたびのき(鹿) いちやひや(鹿)
タブ系			いたんぼ(和) いぬたんぼ(和) いぬやたび(和) かわたんぼ(和) ほんやたび(和) やたび(和) やたんぼ(和) わたび(和) たっぼ(和) ^{※1} たんぼ(和) たんぼぼ(和)		いぬたぶ(高)	いたんび(鹿・熊) いたんたぶ(鹿・熊) いんのたび(長) からたぶ(鹿) かわたつのき(鹿) かわたび(鹿・熊) かわたぶ(鹿) いたぶ(宮・鹿) くそたつ(鹿) くそたび(鹿) くとつ(鹿) こたつ(宮・鹿) こたつのき(宮) こたつのは(鹿) こたんのほ(鹿)
チチ系	あまじっこ(千) ^{※2} ちっこのき ^{※2} (千・伊豆諸島) ちんこーぼく(東)		ちちこ(三) ちちたっぼ(三) ちちのき(三・兵) ちちのみ(三) ちちぶ(三・和) ちちふく(和)	うしのちち(山) ちちのめ(岡) ちちぼ一ず(山) ちちまめ(岡・山) ちちんぼ(山)	ちちもものき(愛) ちちんぼ(福・熊) ちっぼ(鹿)	ちちぶ(福) ちちんぼ(福・熊) ちっぼ(鹿)
イヌビワ・ ビワ系		かわびや(静) かわびわ(静) さーびわ(静) さわびや(静) さわびわ(静) やまびや(静)	いらすのびわ(京) こびや(和) ごびや(和) こびわ(和・三) ほんごびわ(和) やまびわ(和)	いぬびぼ(島) いぬびわ(香) えのぼわん(島) うしびわ(岡) うしぶわ(山) やまひわ(山) やまびわ(島・山)	えのびわ(肥前) やまびわ(佐・長・宮)	
イチジク 系	さるいちじく(千) やまいちじく(千・神)		からすのいちじく(愛) やまいちじく(奈・和) こいちじく(和・奈) どくいちじく(和) にじく(和) ^{※1}	いぬいちじく(岡) やまいちじく(島・山)	いしずく(福・鹿) いせずき(福) いっずき(福・熊) いっずく(福・熊)	ういちじく(熊) こいちじく(宮) やまいちじく (福・宮)
ホオズキ 系			かーほ一ずき(静) かきのほ一ずき(三)		いちほ一ずき(愛) いぬほ一ずき(愛)	やまふ一ずき(熊)
モモ系	さるもも(千)		いぬもも(和) うしもも(和)		*あまもも	

ク McCormick	いそぐるみる(伊豆諸島) かーぐるま(〃) かーぐるみる(〃) かわぐるみる(〃) くるみわじ(〃) こわぐるみる(〃)											
イヌ系					*いぬび(和) *いぬびや(和) *いぬもも(和)	*いぬやたび(和)	*いぬいちじく(岡) いぬとーがき(広) *いぬびぼ(島)	*いぬいたぶ(高) *いぬいちじく(愛) *いぬのひぼ(香) *いぬほーずき(香)	*いぬたぶ(鹿)			
ウシ系					うしじゃっぼ(和) うしのした(大) *うしもも(和) うしらっぼ(和)	*うしわ(山) うすのした(山) *うしのち(山) うしのひたゝぎ(山) *うしのひたい(山)※3 *うしびわ(岡)	うしのひたい(愛) うしのひたい(高) うしのひたい(高) *うしびや(愛) *うしびわ(愛)	うしほした(福・大) うしふて(大・宮・熊)	*うしちじく(熊)			
カラス系	からすまわり(伊豆諸島)				からすのなし(和) *からすのひわ(京)		*からすのいちじく(愛) *からすびや(香)					
サル系	*さるいちじく(千) さるのしり(東) *さるもも(千)				さるのしり(京) さるのほーずき(三)							
甘い系	*あまじこ(千)※1 あまほぜ(千)											
～額?												
～打て?					ごーじ(三)							
～叩き? ※4												
その他の動植物												
不明												
	くそずんぼ(千) ずんぼ(千) まわり(伊豆諸島) まわりのき(〃) *からすまわり(〃)					おぼほ(和)※7 うどんげ(三)※8 こり(三) こまのき(城州) じくしん(和) どんまい(三) ひゆしな(和)	かなび(島) かまび(島) だっこー(山)		おとぼ(大) おとほ(大) たき(鹿) ちーきび(沖) みんこぎ(鹿) みんこぎ(鹿) めんめんのき(鹿)			

のうち太字の地域はイスビワを削りかけに用いる地域。地域名称の前の「*」は、別のカタゴリーと重複しており、既出のもの

【注】※1 「たんぼ」＝第一音の「い」が抜けたものか(小川1973) ※2 「ちっこ」は乳首、乳汁を意味する(倉田1962) ※3 「うしのした」「うしのひたい」はイチジク方言にも有
 ※4 「～ぶて」「～ぶたい」の方はウシノヒタイ(牛の額)の転訛説。牛の鞭に用いたことから「牛打(ぶ)」説がある(倉田1962) ※5 「かぶち」は当地の方言でダイダイのこと
 ※6 「とーがき」はいちじくの方言 ※7 ホオズキ遊びに由来する幼児語(小川1973) ※8 石川で「うどんげ」はイチジク方言

【参考文献】八坂書房2001『日本植物方言集成』／綾郷土誌編纂委員会1982『綾郷土誌』／小川由一1973『紀伊植物誌(一)』／紀伊植物誌刊行会／小野重朗1985『知覧の民俗(二)』、『知覧文化22』知覧町立図書館／川野和昭1985『小正月祭具考』、『陸雲6』鹿児島県立甲陵高等学校／北山易美・片岡八郎1987『かこしま今昔』南日本放送／倉田 悟1962『樹木と方言』地球出版／豊田町誌編さん委員会1996『豊田町誌』通史編／屋久町郷土誌編さん委員会1995『屋久町郷土誌2』

チチノミからの変化であり「犬」ではないとする説もあるが、倉田悟も指摘するように、～ビワとつく地域名称がほかにも多数あることを考えれば、やはり「犬」と考えるのが妥当であろう⁸。イヌビワはまた、ウシとも関わりが深かったらしい。ウシブテなどの名称は、この材を牛のムチに使用することから牛打^ぎちが牛ブテになったとの説、葉が牛の額の形に似ているため、「牛のひたい」がウシブタイ、ウシブテになったとの説などがあり〔倉田 一九六二 一六～一七〕、はっきりした由来は不明である⁹。

このように、イヌビワは非常に豊かな地域名称を持つが、それと関わるのが命名者としての子どもであろう。倉田悟は「イヌビワは暖国に育った人々にとって、まことに懐かしい木である。秋になって黒紫色に熟した実の甘味は子供たちの舌を無性に喜ばせる」と記しているが〔倉田 一九六二 一六〕、アマジッコ、アマモモなどの名称も、こうした子どもたちによる命名であったかと思われる。倉田によれば、アマは甘い、ジッコは乳首や乳汁を指すという。あるいは小川由一によれば、イヌビワのホオズキ系名称は、女の子がイヌビワの果実で「ほうずき」を作ることからついたと推測されると言い¹⁰、オボボ、カラスノナシなどの名称もこれに関連して起こった幼児語ではないかという〔小川 一九七三 二一〕。多彩な地域名称の背景のひとつには、子どもの柔軟な発想の活躍があったとみてよいだろう。

(2) 地域名称と聖性の表現

以上、ヌルデ、ミズキ、イヌビワに関して、その地域名称のバリエーションを確認してきたが、これら名称という表象と、それぞれの樹木に対する認識のいかなる関わりの方が引き出すことができるだろうか。

第一に指摘できることは、樹木に対する聖性の認識を名称に刻印している地域と、それをハレの用途に用いる地域とが一致していることである。すなわち名は体を表わしていると言えるのである。たとえば渡邊三四一は列島におけるヌルデの地域名称の東西差に、ヌルデに対する認識の差異をみてとっている。西日本では、ニワトコの地域名称（タズ）と

の対比によるとされるキタス系名称や、カブレ、マケギなど負の側面を表現した名称が多い一方、東日本ではカツノキ系（勝軍木）やゴマギ系（護摩木）、果実の利用からのシオノキ系名称、オッカドやホダレ、ダイノコなどツクリモノの名を冠した名称など、ヌルデを肯定的に捉える名称が目立つ。これを受けて渡邊は、ヌルデに対する「…認識の東西差は明らかで」あり、「とりわけ東日本には、ヌルデを積極的に捉える文化的・宗教的背景があったものと推察される」と結論づけている〔渡邊 二〇〇七 一六～二〇〕。

削りかけに即してもう少し高度を落として検討すれば、たとえば東北地方でヌルデを用いて削りかけを作るのは、筆者の管見の限り岩手県南から宮城県北にかけての一带のみであるが（II-三章参照）、そこではヌルデはほとんどがカツノキ系名称で呼ばれる¹¹。しかも、人々はカツノキという名称に何らかの聖の要素——あるいは少なくともプラスの要素、一般的には「カツ」という音韻が意識される——を認めていることが多い。つまり、その名称自体に対するプラスの認識が、ヌルデを祭りの用途に供するための根拠のひとつになっており、この場合、名称と用途とが相まって、樹木に対する聖性の認識を形作っていると考えられるのである。反対に、渡邊がヌルデの「負の側面」を表現したと評するカブレ、マケギ系、あるいはキタス系の名称を用いる地域では、これをツクリモノに用いることはほとんどない。もっとも、こうした名称の分布する西日本での報告例自体が少ないのだが、そのなかでは、ツクリモノに用いられるヌルデはフシノキ系名称で呼ばれることが多く、一部コノミヤノキ（宮崎）などツクリモノの名が反映される場合もある。フシノキ名称は、フシ（五倍子）に対する有用性の認識からつけられた名称であり、木に対する肯定的な評価がその背景に認められる。こうしたことは、地域ごとに木の名称に付与（認識）される正・負の印象が、その用途にも対応していることを示すと言ってよい。

同様のことはミズキ、イヌビワに関してもいえる。すでに触れたように、ミズキ系の名称は呪術性あるいは聖性への認識と結びつく場合が多いが、そうした名の使用はおおむね、この木をツクリモノや呪術的用途に用いる東日本の地域に限られるとあってよい。これを祭りの木として用いない地域では、たとえばダンダンミズキなど、積極的な評価も否定の

意味も含まれていないと思われる名称や、ホンミズキ（和名クマノミズキ）に対するアオミズキなどの二次的な名称が用いられる。イヌビワも、これを削りかけに用いる地域ではタブ系名称が多い。樹木に対する聖性の認識が、名前という形で表出しているとみてよいだろう。

命名と樹木との関わりで第二に触れておきたいのが、ツクリモノの名を冠した名称が多いことである。たとえばすでにみたようにヌルデではオッカドやアワボ、ホンダル、ミズキはダンゴノキやカギノキが挙げられるほか、ニワトコなどもツクリモノの名称で呼ばれることが非常に多い木である。たとえばアボヘボ、アワボなどのアワボ系名称、ダイノコンゴ、デイコンゴなどダイノコンゴウ系、ハナギ、ハナノキなどのハナギ系などが、これを小正月のツクリモノに用いる関東平野部で顕著にみられる。このようにツクリモノの名を冠した名称は、その樹木の利用がまさに名前のツクリモノに特化されていること、もしくは、そのツクリモノと深い結びつきにあることを明確に示す点で重要である。この場合、名前はそのツクリモノと樹木との関係性を表象化したものとなっており、また、その関係性を伝承する記憶媒体の役割をも果たしていたといえる。なかには両者の実質的な関わりが失われた後にも名前だけが残ったと思われる例もある。たとえばⅠ－六章で紹介した静岡市有東木ではヌルデをアーボの木と呼ぶが、当地でのツクリモノの名称はダイノコとハナであり、アワボと呼ばれるツクリモノはない。しかしおそらく、本来はツクリモノがアワボ名称で呼ばれていたことが後に忘れられ、樹木の名称にのみ、その記憶が残されたものと考えられる（このことについてはⅠ－六章・註 17 で検討している）。名前は、その発生の段階における対象物と命名者との関わりを凝縮し、保存したひとつの形とも言えるのである。

以上のように名称にはその樹木に対する認識・印象が刻印されており、それはすなわち、人々はその樹木とどのように関わろうとしていたのか、その（意識的・無意識的な）意思を示すものということができる。

最後に、命名と認識に関して触れておきたいのは、こうした聖性を帯びた名称の陰で、

これと共に地域名称のバリエーションを形作っている「負」の印象を帯びた名称とその発生についてである。

上に挙げた三つの樹種のなかではイヌビワの例がもっともわかりやすい。そもそもの標準和名である「イヌビワ」は、「イヌ」＋「ビワ」で成りたっていると考えてよい。このイヌという接頭語は、“本物”に似ていながらも劣っている植物につけられることが多く¹²、たとえばイヌビワに関しては小川由一が、「紀南地方ではおいしい実を結ぶ株（雌株）をほんやたび・やたび 実が小さくて、おいしくない株（雄株）をいぬやたびとって区別する」と報告している〔小川 一九七三 二一〕。なぜ本物に似て非なるものに「犬」という形容を付すのかは、人々の植物観、あるいは動物観を知るうえでも重要な事柄と思われるが、本題でないので措く。いずれにしても、ここでは基本名称（ここではビワ）が先行しており、それに似て非なるものと認識されたうえで名前がつけられたことがわかる。これはほかの植物の名を冠したヤマイチジクやイヌモモなどの名称も同様と思われ、イチジク、モモなどの名称が基本になって後次的につけられた名称であろう。こうした命名法は、その植物（ここでは実）の有用性に関わる問題をはらむものと思われ、イヌビワが、基本名となった植物よりも有用性が低く、周縁的であることを示すものであろう。

こうした名称は、明確にほかの植物名が先行しているわけで、つまりは両者の類似が認識されて以後の相対的に新しい命名であると考えられる。わかりやすいのは関東から九州まで広くみられるイチジク系の名称（ヤマイチジク、イヌイチジクなど）で、これは近世のイチジク伝来以後の比較的新しい名称と考えられる¹³。イチジクの別称のトウガキ（唐柿）を採り入れたヤマトーガキ、イヌトーガキなどの名称も同様であろう。こうした命名法は、名前の分化、発生を考えるうえでも興味深いが、さらに重要なのは、この木の名称がひとつに固定されないでいて、近世以降においてもどんどん新しい名称がつけ加えられたこと、すなわち、この木が新しい名づけに対して常に開かれていたことである。

ところで、削りかけの樹種群には地域名称のバリエーションが豊かなものが多い。ここでの文脈で言えば、それは新しい命名に対して開かれた樹木たちなのである。名づけとい

う行為が、人と樹木との関わりの中かでしか発生しないことを考えれば、地域名称が多いことは、その樹木と人々との、ある関わりの在り方の傾向を示すものと捉えることができる。たとえばイヌビワの場合は、「本物」に比べて有用性の点で劣ると位置づけられていたこと、また子どもの関与などが、命名の背景として挙げるることができる。

そこで次節では、命名に対して開かれていることがどういった人と樹木との関わりを表わすのかを、地域名称の少ない樹種——命名に対して閉じられた樹木——との比較の中かで検討していきたい。それは、どういった関わりの中かにある樹木が「祭りの木」として選ばれるポテンシャルを持っているのかという問いでもある。

第二節 植物と名づけ ——先行研究から

削りかけに用いられる樹木に対する命名に関して、大きな特徴として挙げられるのが地域名称の豊かさである。『日本植物方言集成』によれば、ヌルデ 一五一種、ミズキ 一二八種、ニワトコ 一一六種、ネコヤナギ 一二八種、キブシ 一四二種、イヌビワ 二〇四種、アカメガシワ 一九二種、コシアブラ 一一八種などの地域名称が数えられており、平均すると、ひとつの樹木につき一一〇・三種となる（表 d）。表 e・f には、このほかの主要樹木の地域名称の数も併せてデータ化してあるが、比較すれば削りかけの樹種の多くが地域名称の多い樹木の部類に入ることは一目瞭然である。

このように地域名称が多いという事実から何を読みとることができるだろうか。ひとつの樹木に対する地域名称の多寡から人々と樹木との関わりの在り方を捉えようとした研究に、川名興の「植物の方言名にみる命名の民俗学的考察」〔一九八六 五九～六八〕や中川重年の一連の研究がある。川名は大原準之助の研究を引きながら、「植物方言指数」——特定の地域の自生植物種類数に対する、地域名称（方言）の数——の高さが、人々と植物との関わりの深さを測る指標となることを示唆している。のみならず、その命名の観点からは、人々が植物と関わってきた、その関係性の在り方を知ることができるのではないかという点を指摘している。

表d 削りかけ材となる樹種群

ヌルデ	151
ニワトコ	116
ヤナギ	ネコヤナギ 128
	カワヤナギ 12
ミズキ	128
キブシ	142
クルミ	オニグルミ 35
	サワグルミ 58
ホオノキ	40
イヌビワ	204
コシアブラ	118
アカメガシワ	192
平均	110.3 種

註)『日本植物方言集成』より

表e 「良材トナルヘキ木種」

マツ(松)	クロマツ 19
	アカマツ(赤松) 19
カラマツ(落葉松)	17
スギ(杉)	6
ヒノキ(檜)	48
モミ(樺)	20
マキ(樺)	18
	イヌマキ 64
	コウヤマキ 21
サワラ(樺)	49
ツガ(樺)	18
ケヤキ(樺)	41
クスノキ(楠)	18
カシ(櫻)	アカガシ 41
	ウバメガシ 49
	ウラジロガシ 31
	シラカシ 33
クヌギ(樺)	105
カツラ(桂)	19
クリ(栗)	8
シオジ(塩地)	13
ナラ(楠)	ミズナラ 86
	コナラ 109
トチノキ(榎)	23
平均	36.3 種

表f その他の樹種

イチヨウ	2
キリ	3
ビワ	3
ハリエンジュ	4
モミ	20
ニガキ	23
スダジイ	25
ヤマザクラ	28
カキ	33
モモ	35
ブナ	38
サカキ	49
エノキ	50
カシワ	50
イチジク	58
シキミ	69
ミズナラ	86
ムラサキシキブ	103
クヌギ	105
タブノキ	107
タラノキ	108
コナラ	109
アセビ	187
ネムノキ	187
(ヒガンバナ)	555

植物学者である中川重年は、こうした人／植物との関わりの在り方をより具体的に検討している。以下、中川の研究を辿りながら、問題の所在を明らかにしていきたい。

まず中川は樹木の地域名称のタイプとして次の四つを挙げる〔中川 一九九〇 一一二～一一八〕。

- ①「単一型」：一定の地域内（村町レベルから郡レベル、県レベル、全国レベルまで）でひとつの種に対する呼称が一つであるもので、たとえばスギなどは全国的に「スギ」の単一名称で呼ばれる
- ②「複数型」：ひとつの種に対して複数の名称があるもので、特徴的な形態や幅広い用途などがある場合が考えられるという。ミズキが代表的である
- ③「細区分型」：材質で細分する場合や生育地で細分する場合など¹⁴
- ④「類似樹種の共通名称」：複数の樹種間に共通な樹種名が与えられるもので、材の用途の共通や生育地の共通が考えられるという。キリ、ハシギ、サカキ、マダ、サワフタギなどが例として挙げられている

ひとつの種がどのタイプに分類されるかは地域によっても異なると推測されるので一概にはいえないが、これを全国レベルの地域名称の多寡で考えれば、②複数型よりは ①単一型が、あるいは ②複数型よりは ④類似樹種の共通名称の場合の方が、全国的にみて地域名称の総数が少ない傾向にあるはずである。反対に、削りかけに用いられる木のように多数の地域名称を持つ種は、全国レベル、あるいは東西日本などといった大きな地域区分における単一的名称がないことを示すものと捉えてよい。

では広域に通用する単一名称がないことは、どういった背景によって説明されうるだろうか。この点についても中川は指針を示してくれている。中川は地域名称の多寡を森林のタイプ、経済圏域の広さ（経済的価値）、木の個性（特性）の高度な利用などの観点から説明している。森林のタイプは、ここでは「自然林」（いわゆる奥山）と「雑木林」（二次林、いわゆる里山）の別のことで、中川は神奈川県下を中心とする方言調査から「自然林の樹木は方言の種類数が少ない、反対に雑木林＝二次林の方は多い」という結果を導き出している¹⁵。しかも、自然林の木は「少なくとも一つの県のレベルの大きさよりももっと大きな範囲で共通」している傾向にあるという〔中川 一九八四 a 一〇〕。一方、中川はとく

各植生類型別の方言の数

植生	高・低木	樹種数(A)	方言数(B)	B/A
自然林	高木	39	66	1.7
	低木	10	13	1.3
二次林 ¹⁾	高木	27	64	2.4
	低木	34	67	2.0
二次林 ²⁾	高木	22	75	3.4
	低木	77	186	2.4
人工林	高木	5	9	1.8
	低木	0	0	—

1) 自然林伐採後、比較的早く消滅するもの
2) くりかえし伐採されても残っているもの

表g [中川1984a] より転載

に明記していないが、中川の作成した表gによれば、人工林を構成する樹種も地域名称が少ない。つまり、人為との関わりでいえば、自然林 → 二次林 → 人工林と人為の度合いが高まるのに対し、地域名称は少 → 多 → 少と推移していることになる。

人工林における地域名称の少なさを、中川は別の側面から説明している。経済圏域の広さ、あるいは経済的価値である。たとえばスギ

やヒノキは近世以前から造林が行なわれ、山地（山村）と消費地（都市）を結びながら商品として広域に流通したため、全国的に単一的な名称となったのではないかとする。こうした要因は自然林の樹木に関しても同様に働くとみてよい。たとえば木地師が材としたブナ帯自然林のトチノキ、ブナ、クリなどは地域名称が少ない（表e・f参照）。中川はその理由を、二次林の樹種に比べて大径木が多く、一般に手軽な伐採や利用が行なわれなかったこと、したがって木地師などの専門の職能集団によって利用され、商品として流通したことにみている。すなわち「山地（奥山）と加工地（漆器産地）、消費地（都市）の間で共通する樹種名で呼称されておらねば市場で混乱をきたす恐れがあったため、単純で共通な名称が生じたのではないであろうか」とする〔以上 中川 一九八四 b 二〕。

地域名称の少ないもうひとつのパターンとして示されているのは、木の持つ何らかのきわだった特性が共通に認識・利用されている場合で、たとえばニガキは「樹皮が強烈に苦く、薬用に使われる」という特性が広い地域で認識された結果、地域名称のバリエーションが少なくなったものとみている。

中川の挙げた以上の三つの要因は複合的に働くとみてよい。たとえば二次林の構成種でも「建築用に使われるアカマツ、クロマツ」などは「樹木方言数は少ない傾向が見られる」という。

以上のような見解は、関わりの中かで名づけが為されるものだという、あたりまえの事実を再認させるものである。その関わりとは、第一にはもちろん対象物である樹木と命名者である人との関わりであり¹⁶、第二には命名しようとする樹木とその他の樹木との関わりである。中川重年は地域名称が発生する理由について、「他の種類との区別点をみつけ、それを名前にするということが多かった」とし、「例えば樹木の生育環境であったり、樹形、葉や花の特徴、木材の特徴であったりと、さまざまの特徴に目をつけたのであろう」と述べている〔中川 一九八八 六四〕。イヌ・ビワやアカ・ミズキのように基本名に接頭語でイヌやアカなどをつける例はもっともわかりやすい。以上のように、名づけが関わりの中かに立ち現われるものだとすれば、名づけの検討もこうした関わりの中においてなされるべきであろう。

以上の観点から、次節以降では削りかけの樹種群の名づけにみえる人—樹木との関わりについて、ほかの樹木との比較の中かから検討していきたいと思う。具体的には、地域名称が豊かであることがどういった人と樹木の関わりを表わすのか、地域名称の乏しい樹種群との比較により論じる。ここでは先に挙げた中川の先行研究も手がかりにしながら¹⁷、人—樹木の関わりの中の在り方を描いていきたい。

第三節 名づけられる樹木たち——地域名称の豊かさと人々の関わり

先に挙げた表 d~f は、『日本植物方言集成』を元に作成した各樹種の地域名称の数の一覧表である。削りかけに用いられる樹種群をはじめ、地域名称の豊富な樹種に共通する点はどこに見いだせるだろうか。

やや抽象的にいえば、これらの木は「公の木」に対する「私の木」と言えるのではない。こうした観点で考えるにあたって、ここでは人との関わりからふたつの視点を挙げる。ひとつはその樹木に対する親近性、もうひとつは有用性と管理の視点である。

(1) 空間・時間による親近性の形成

地域名称の多い樹木群に共通してみられる第一の特徴としては、空間的な身近さが挙げられる。それは中川も自然林／二次林の構成樹種の違いとして指摘した通りであり、事実、表 d～f のうち、地域名称の多い樹種をみていくと二次林など、いわゆる人為的生態系を好む樹種が多いことがわかる。削りかけに用いられる樹種群はもちろん、表 f のタラノキやクサギ、ムラサキシキブ、ネムノキなども先駆的特性をもつ植物であり、人の活動との関わりでいえば、やはり人為的攪乱のある場所を好む。このように人間／植物それぞれの活動の結果として空間的に身近に存する樹木がある一方で、より積極的に人為的な力によって伝播し、あるいは守られてきたと思われる樹種にも、地域名称の豊かなものが多い。たとえば先に挙げたクスノキ科のタブノキなどは一〇七の地域名称が報告されている。元々、南方系の木であったタブノキは、おそらくは信仰の木として、北は青森県まで海岸沿いに点々と分布しており、そこには人為の力による運搬があったものと推測されている。樹木ではないが圧倒的に地域名称が多い植物がヒガンバナで、『方言集成』には五五五種が報告されている。有菌正一郎によれば、ヒガンバナの鱗茎に含まれるデンプンは救荒食として利用されてきたが、日本には種子ができない三倍体のヒガンバナしか自生していないことから、これが選択的に（つまり人為的に）日本に持ち込まれ、人の手によって生息域を拡大していったものと考えられるという¹⁸（三倍体のヒガンバナは二倍体のものよりも鱗茎が大きく、デンプン量も多い）〔有菌 一九九八 一五〕。

このように人にとって空間的に身近な——すなわち、意図的・無意識的人為性に負う——一樹種のうち、数多くの地域名称をもつ木は、とくに目立った視覚的特徴を持つ場合が多い。そのことは、こうした特徴——樹皮や実、葉、葉柄などの色や形の特異さ、きわだった成長力や生命力、あるいは芽吹きや紅葉が早いなどの視覚的要素など——が、名づけの契機としては重要であったことを窺わせるものである。実際、川名興は長野県佐久地方における植物の地域名称の分析から、地域名称のうち「植物自体の特徴と植物のくらしによる命名¹⁹」が、全体の六六・六%に及ぶことを示している〔川名 一九八六 六七〕。たと

例えば色でいえば、相対的に赤い、白いといった特徴は目につきやすかったらしい²⁰。『方言集成』の「方言名索引」から色の名前ではじまる地域名称を引くと、赤、青、白、黒などの基本色のうちでは、アカベン（和名ネジキ）、アカミノキ（和名モッコクほか）など、アカではじまる名が三〇〇種程度でもっとも多い²¹。次いでシロ～が二〇〇種程度、アオ～、クロ～はそれぞれ一七〇種程度である（いずれも樹木に限らず植物全般の地域名称）。こうしたことは、人々の関心・認識が、とくにどういった色に向けられていたのかを考えるうえでも興味深い事実であろう。

さらに空間的な身近さに関わる要素として、命名者としての子どもの存在も重要であろう。市村弘正は、子どもの名づけ行為においては「その所与性への正当な無視において、名前にもとづく創造の『奇蹟』的能力が発揮される」とする。つまり、子どもたちは「既存の社会が与える名前の体系から離脱して、その物との不断の付き合いの中から」命名するのである〔市村 一九九六 一三五〕。言うまでもなく、「不断の付き合い」は空間的な身近さによってまずは担保されるものであった。

こうした空間的な距離の近さに加え、時の経過もその樹木に対する親近性を形成するための欠くべからざる背景のひとつであったろう。削りかけに用いられるような樹種群はいずれも日本列島の自生種とされ、縄文遺跡からの出土が報告されているものも多い²²。このことは——人々が認識し、利用していたかどうかは別としても——これらの樹木の日本列島における歴史の古いこと、しかも遺跡（すなわち人間の活動の跡）からの出土ははからずも、それが人々の生活の傍らにあったことを示している。先に例に挙げたヒガンバナなども、縄文晩期にはすでに日本に持ち込まれていた「史前帰化植物」と考えられている（註 18 も参照）。

反対に、たとえば明治初頭に移入されたハリエンジュ（別名ニセアカシア）などは、先駆種であり、またトゲを有するなど特徴的な形態を持っていながら地域名称は四つしか収集されていない²³。社寺や街路樹としてなじみ深いイチョウも、伝説をもつ巨木が各地に多いが、この木は一三世紀末に中国から伝来したとされる渡来種であり〔菅洋 二〇〇四

二五九)、地域名称は二種しか報告されていない。イチョウという単一名称が全国に通るのである。キリなども日本には材として移入された木とされる²⁴。『源氏物語』にも桐壺の巻があるように古来より親しまれ、また成長早く材も優秀であることから植栽・生育が奨励されて広まったと考えられており、たとえば会津地方などでは「カドギリ」と呼んでこれが庭の一角に植栽してある風景を現在でもみることができる（写真1）。しかしそうした身近さにも関わらず、地域名称は三種の



写真1 会津地方のカドギリ

みの報告である。むしろ、中川が「キリ」を「類似樹種の共通名称」の例として挙げているように、木目が似ていたり、キリの代用として用いられる樹木に、サワギリ、カタギリ、ヤマギリなどの名称が当てられており²⁵ [中川 一九九〇 一一五]、このことは、これらの樹木への命名行為に先行して「キリ」という単一名称が広く認識されていたことを示すものと捉えてよいだろう。

さて、上に例を挙げたヒガンバナ、ハリエンジュ、イチョウ、キリはいずれも他地域（ここでは海外）から移入されたものであり、したがって、いずれもはじめから何らかの「名前を持った植物」であったはずである。そのなかでヒガンバナが圧倒的に豊かな地域名称を持つにいたったのは、第一には、いま挙げたような時間の作用であろう。それは明治になって移入されたハリエンジュとの対比でも明らかであり、長い時をかけてあらたな用途や意味づけが与えられることにより、各地で名づけが行なわれたとみてよい。現に「ヒガンバナ」という名称も、有菌も記すとおり [有菌 一九九八 一六]、明らかに仏教渡来以降に秋の彼岸に結びつけて考えられるようになって発生した名であろう。

しかし、イチョウやキリは帰化種とはいえ、すでに千年単位の時間を身近に過ごしている。それにも関わらず地域名称が乏しいことは、もうひとつ別の側面、有用性と管理といった視点から説明することができるだろう。

(2) 樹木の有用性と管理

有用植物と名称の関わりについて、山田孝子が述べている次の視点は重要である。

「有用であるものは他の植物との識別にあたって有用部位に着目して命名される傾向がある…有用な植物では有用性と植物そのものが一体化して認識されていた」

〔山田孝子 一九九四 一二五〕

たとえばスギは「直ぐ」。材としての優秀さがその名に込められている。またクリやウメ、モモは、有用である実の名前が樹木全体の名称と一致している。このことは、名称そのもののなかに、その木の利用に際しての人々の意思、認識が刻みこまれていることを示すといつてよい。それは先に検討したように、ヌルデやミズキ、イヌビワの地域名称に、あらかじめ聖なる印象が付与されていることと同じである。その意味において、有用植物はその有用性が共通認識され、定まっている限りにおいて、名称も固定されると考えてよい。別の見方をすれば、有用性が広く公に共有されているものほど広く知られた名前、定まった「公」の名前をもつと考えてよいだろう。たとえばイヌビワの地域名称と、その元となった植物の名称を比較すると、モモ、イチジク、クルミ、ビワなどはいずれも有用植物と認識されるものであり、いずれも地域名称が多いとはいえない（それぞれ三十五種、五十八種、三十五種、三種）。

逆にいえば、イヌビワをはじめ豊富な地域名称を持つ木は有用性に欠けると認識されている場合が多い。一般に有用性が認められていない樹木——削りかけの樹種群の多くはこれに当てはまる——は、その木に対する定まった認識が共有されていないと考えてよい。したがって、その樹木と関わった命名者の新しい認識（すなわち名づけ）に対しても開かれていた、としてよい。こうした公的には役に立たないもの、無駄なもの、不完全なもの、したがって公的な名前を持たないものは、たくさんの余白を持つ。人々には、多様な名づけ（認識）の余地が残されていたといつてよい。

この有用性と名づけについては管理という側面からも考える必要がある。有用性の高い樹木は、その価値からしばしば公的な組織の管理下に置かれ、管理のための単一名称が与

えられる傾向にあるからである。市村弘正も指摘するように、本来「名づけることは、『所有する』こと」〔一三八〕すなわち、支配することなのである。

公の管理といっても、ここで想定されるのはいくつものレベルでの公である。国やムラ、あるいは中川が指摘するような職人組織や商人組織、宗教組織もそれに数えられるだろう。こうした一定の地域的広がりをもつ組織によって管理される樹木は、公的な意味での有用性と結びついていると考えてよい。たとえば斉藤昌宏は明治初期に新潟県の佐渡で作成された「佐渡御料林の備林台帳」を分析し、毎木調査で記録されたひとつひとつの樹木名（標準和名）を佐渡における地域名称や樹形、島内の分布などに基づいて推定している。その結果、「林業上有用な樹種は当時の標準名で、そうでない樹種については佐渡地域の方言名で記録されていることがわかった」としている〔斉藤 二〇〇七 一四五〕²⁶。このことは、有用と判断された樹種については、中央が統一的な名称のもとに管理下に置いたことを示している。実際、斉藤も引く明治九年（一八七六）制定の「官林調査仮条例」で、「良材トナルヘキ木種」として挙げている樹種の、全国の平均地域名称数は三六・三種類であり、削りかけに用いられるそれと比較して七〇種以上も開きがあることがわかる（表 d・e）。これら「良材トナルヘキ木種」はその経済的価値を利用するために国やムラ、あるいは商人組織の管理下に置かれた樹木であり、その管理のために必要であったのが統一的名称であった。また役割（認識）の定まっている樹木に対しては、名前は所与で自明のものとなり、あらたな命名（認識）は発生しにくい。キリの地域名称が少ないことも、こうした点から説明できる。つまり、これが「キリ」という単一的名称を伴いながら伝播・植栽され、その有用性への認識、したがって役割の固定ゆえに、あらたな命名が拒まれたものと考えられる。

もちろん有用といった場合の価値は経済的なものに留まらない。たとえば広域な経済活動とは関わらなくとも、ムラの構成員の自給的生活にとって不可欠であり、ムラの管理下に置かれたような樹種も、やはり公の木といってよいだろう。マツ類は二次林の構成種でもある身近な木であるが、地域名称の少ない樹種のひとつであるのは、その材はもちろん、

落枝や松葉が重要な薪炭材で、しばしばムラの管理下に置かれていたためと考えられる。トチやクリも公的な性格をもつ樹木と考えてよいだろう。クリは三内丸山遺跡の巨大柱に用いられたように古くから有用な建築材であり、また重要な食糧であって、人々にとって身近な木であったことには間違いないが、地域名称は八種しか報告されていない。トチノキも同様に二十三種しかないが、これらの木は農山村においては永らく重要な栄養源のひとつで、その採集にはクチアケが設定されるなどムラの共同管理下に置かれることもしばしばあった。その意味でこれらはムラの公の食糧であり、財産であり、公の樹木であったといえる。このように生活上必須な利用法が明確にあり、公的に管理される樹木は用途（認識）が固定化されており、あたらしい名づけが行なわれないとみてよいだろう。

また宗教儀礼や年中行事に用いられる樹木でも、サカキやシキミのように神道や仏教と密接に結びついた樹種は、それぞれ四十九種、六十九種の地域名称が報告されているが、これを民間の行事や呪術でしばしば用いられるタラノキ（一〇八種）やアセビ（一八七種）と比較すると、少ないと言わざるをえない。「サカキ」などはむしろ、幾種類かの樹種がこの名前と呼ばれる「類似樹種の共通名称」であり²⁷、特定の観念（第一義的には、常緑樹であること）の広い地域での共有が、樹木の実体に先行し、名称という形で表象されたことがわかる。これらは象徴的価値において有用性をもつ樹種であるが、それが特定の宗教組織と強く結びつくことで公的性格を有したのが前者で、家やムラといった小地域における私的な有用性に留まっているのが後者と言うことができるだろう。イチョウもやはり象徴的価値をもつ公的な樹木であったとあってよい。イチョウは多くが寺社への植栽である。これらはいずれも所与の名前を持つ木として受け入れられ、その樹木に基礎づけられた（象徴的）有用性に基づく公的な性格から、あらたな名づけが拒まれたとあってよい。

以上、人々と樹木との親近性と、有用性と管理という視点から地域名称の多寡について考察してきた。実際には、こうした視点が複合的に働くことで、名づけが行なわれ、あるいは行なわれなかったものとみてよいだろう。

(3) 祭りの木とその選択 —— 聖性の表象と無用性

公の木に対する私の木、それはほとんど、これらの樹木に対する親しみと言い換えてもよい。その親しみは空間的な意味における近さであり、日々の交渉の積み重ねのなかから時間をかけて紡がれてきたものであった。また、有用性に欠けるがゆえの公的名称（認識）＝所与の名前の欠如は、削りかけの材に関して語られる（日常における）無用性をよく示していると共に、感覚、意識的な意味での親近性をも表わしている。それはイヌビワのように子どもが命名者となる場合にもっとも顕著に示されると言ってもよい。そこでは樹木との身近な接触の具体的経験を通して、驚きや発見、喜びが想像力を喚起し、名づけが発生する。人と樹木との関わりでいえば、樹木との接点が常に名づけの生成の現場になりえるような、生き生きとした関わりが保たれてきたといえる。また、柳田國男は「子供は多くの草木の命名者であった」ことを方言名の検討から示したうえで、「こんな子供らしい物の名までが、行く／＼採用せられて大人の言葉になって残って居る」ことをくりかえし指摘している〔柳田 一九九九（一九二七）三五～三七〕。所与の名前がないことは、こうした子どもの名づけに対しても、その名が常に開かれていることを示すものでもある。樹木名称には、人々と樹木との、ほとんど無意識のレベルでの関わりの在り方、その歴史が、刻み込まれているとあってよい。人々はこうした身近な「私」の木を、小正月等の祭りの木として選択するのである。

名づけの在り方にはまた、卑近さと聖性という、表裏する認識がそのままに封じ込められているとあってよい。ミズキや、イヌビワ、ヌルデは「複数型」名称をもつ木——一定地域内で複数の名称を与えられた樹木——である。たとえば群馬県片品村御座入ではミズクサのほかに、アカボヤ、カギンマの三種類の地域名称があり、山梨県丹波山村では和名ヌルデに対してオッカドノキ、カツノキ、フシノキの名前があるといった具合である。このことは、これらの樹木が多様な名づけの時空を持っていたことを意味する。市村は次のように述べる。

「名前が人間と或る事態（物事）との相互交渉のこもったものであり、固有の経験を刻みこ

まれているとすれば、それは発せられ用いられる固有の場をもつことになる。いいかえれば、特定の時空間の存在性格が特定の名前に込められているかぎり、その名前は他の場における存在とは衝突せざるをえない。こうして、時空間の移行と越境に伴って、特定の事物は別の名前と呼ばれることになる」〔市村 一九九六 一三七〕

その「時空間の移行と越境」は、削りかけの樹種群に関しては、ケからハレへの越境であったといってよい。すなわち日常における卑近性あるいは無用性から、祭りの木としての聖性への移行である。言葉を換えれば、祭りの木をめぐる命名の在り方に、その樹木に与えられた両義的な認識が顕われているといつてよい。ケの時空におけるこれらの樹種は、日常的用途における有用性／無用性を基軸に設定される評価から言えば、むしろマイナスの方向に振れている。そうした「無用」な木を、祭りに供するための特別な木として人々は選びだし、聖性を帯びた名称を与えることによって聖別したのである。無用性と聖性とをひとつの樹木に同時に付与（認識）する。樹木と命名をめぐる事象から、そうした樹木との関わりの在り方、あるいはそうした関係性への志向を読むことができるのではないか。

人々が同様の材質や生態条件をもつ樹種のなかから、なぜヌルデやミズキ、イヌビワ、あるいはニワトコ、アカメガシワなどを選び出したのか、その当初の動機を知ることは、いまとなっては不可能であるか、少なくとも検証は難しい。しかし、その樹種を選ばせ続けたもののひとつは、ここで取りあげたような名づけをはじめとする民俗事象であったことは確かである。樹木との関わりのなかで築きあげてきた様々な意味づけの体系を、人々は民俗事象というかたちで表象することで、折りに触れて再認し、伝承していくための装置にしたと言えるのではないだろうか。

ここまで四章・五章にわたって、人々が特定の樹種を選択する——削りかけが作りだされる——背景となる人と樹木との具体的、観念的な関わりの在り方を描いてきた。それはおそらくほとんど意識化されることはなく、したがって言語化もされない。しかし削りかけと樹木をめぐるモノ、コトを通して、そうした関わりの在り方が表出しているといつて

よいだろう。

- 1 浜中チセさん（昭和七年うまれ）談。なお、アカメガシワについては三国信一の論文〔二〇〇五〕に詳しい。
- 2 これに関連して守山弘は、ヌルデの「現在の特別扱い」は「塩の木として大切にされて」いた「時代の名残りなのではないか」と推測している。守山は東南アジアの山地民の多くが「塩味のする植物を塩の代用に使っていた」とし、そのなかにヌルデも含まれていたことを紹介している〔守山 一九八八 一五五～一六〇〕。
- 3 筆者の調査地で言えば、たとえばコシアブラで削りかけを作る秋田市太平ではヌルデのことをゴマゾー、ゴマギなどと呼ぶ。やはり「使われない木」、「邪魔な木」、育ちのいい木と認識されているが、これを削りかけに用いることはない（田口昭平さん、昭和一二年うまれ）。
- 4 折口信夫は、ミズキの名の「水」の意味に注意を向け、「みづ木は本当の名ではなくて、その使用法からの名であります」とする。折口は小正月に門口などに立てる丹生木（ニューギ、オニギ等）を「みづき」とも呼ぶことを示したうえで、それが、「山人」が冬に里の鎮魂に降りてきた際、「鎮魂に先立ってみそぎ祓へを行って、人々の身を忌み浄めさせ」るために使った鎮魂の道具、または「鎮魂したといふしるし」だとする。そして、ミズキの名は「水の祓へを授ける木といふやうな意味のもの」で、「神聖な水でみそぎをしたと言ふ印象を木の名に残し」たものとする〔折口 一九九六 一五四～一六四〕。いわゆるニューギをミズキと呼ぶ例は、管見の限りにおいて現在ではあまり聞かれないが、本文でみるようなミズキの「水」の性に関わって伝承される様々な習俗は、折口の指摘するとおり、ミズキに特別な意味を認めるものであろう。
- 5 こうした伝承は削りかけ調査のフィールドでも数多く聞くことができる。たとえば宮城県仙台市や一関市花泉町ではこれを火防用に屋敷の隅に植えたものというし、秋田市太平黒沢や埼玉県東秩父村皆谷では、屋根の梁のうち一本だけをミズキ材にしたり、上棟式で棟木に縛りつけることが行なわれた。
- 6 秋田県仙北地方でも、屋敷に植えたミズキのせいで家の者が病気になった伝承が記録されている〔関編 二〇〇二 五二～五四〕。
- 7 スモートリ系の名称も同じ所作からの命名かと思われる。このほか、カンダイ、カンダイノキ（新潟）というのも、「鋳台（くわだい）」の意と推測され、同系統の名称と考えられる。たとえばI-四章二節（2）で紹介した秋田県西木村の「カンデヤアッコあげ」行事の「カンデヤアッコ」は鋳台の方言と思われ、その実態はカギ型をした祭具である。
- 8 倉田悟は、「津山尚氏はチチノミ → チチブ → イチブ → イノブ → エノビ → エノビワの転訛をきれいに考えられ、イヌビワのイヌは犬ではなく乳の意だと述べられている」とした上で、ビワのつくイヌビワの地域名称がほかにも多数あることを紹介し、「一概に犬枇杷を否定し去る訳にはいかないと思う」としている〔倉田 一九六二 一七〕。
- 9 倉田はコウジブタイという地域名称を「仔牛額」とみて、「～ブタイ」系名称をウシブテと同系に捉えている。しかし、ウシブテのほかに、ムシブテ、イシブタエ、フツベタタキなど、打つ・叩く系と考えられる名称がほかにもあることを考えれば、ムチの利用に由来する名称である可能性もじゅうぶんにあるだろう。
- 10 和歌山の「伊都・那賀両郡の山村」では、イヌビワの「半熟な実を、もみやわらげて、果肉をもみ出し、空虚となった外皮を『ほうずき』としてなぐさむ」ことが「かなり広く残っているようである」という〔小川 一九七三 二一〕。
- 11 東北地方ではツクリモノはカツノキ名称と結びついているといえる。逆に、表 a にみられるゴマギやフシノキなどの名称は、東北では凡そヌルデでツクリモノを作らない地域のヌルデ

名称となっている。

- 12 こうした例はアイヌ語でも知られている。山田孝子はブクサ（ギョウジャンニク）に対するセタ・ブクサ（スズラン）など、「犬」を意味する「セタ」が属詞としてつけられる植物と、基本名をとった植物とを比較し、「近縁の 形態的にも類似するが利用価値の異なるものにセタ（犬）を属詞として用いる傾向があること」を示唆している。しかも、セタという語彙は「とくに有用性という点で」似て非なるものの隠喩として用いられるという〔山田孝子 一九九四 一三二〕。
- 13 イチジクは寛永年間（一六二四～四三）に渡来したとされる〔牧野 一九八二 三一〕。イチジクの名は、イラン名の anjir に対する中国名「映日果」の音読みとする説が有力であるが、本来これがイヌビワを指した名称であり、伝来後に現在のイチジクに名前が移ったという説もある〔平井 一九九六 一八八〕。
- 14 たとえばケヤキは、木の性がおとなしく狂いの少ないものをアカゲヤキ、反対に狂いやすいものをアオゲヤキと呼び（神奈川県）、あるいは山地に生育する自然性のものをヤマゲヤキ、里（低地）に生育するものをサトゲヤキなどと呼ぶという（東京都）。
- 15 こうした樹種名の多寡は、先の単一型／複数型という区別では十分に捉えきれない。中川は、「二次林の木が、一つの村内で単一の言葉で呼ばれていても〔＝単一型〕他の地域では違っていることも多い」という〔中川 一九八四 a 一〇〕。
- 16 中川重年も次のように述べる。

「これらの名前のひとつひとつは、樹木と人間のつながりを現わしたものとして意義があるといえる。したがってある地域で聞かれる樹木方言はその地域に展開する生活文化の一面を表わしていると考えてよかろう」〔中川 一九八八 六四〕

また、川名興は一九八六年の論考で以下のように記した。

「命名の観点を人の位置から観察してみると形、生態、色などの命名は、人々が植物に近づき客観視したものであり、利用、遊び、味などは直接植物にふれたものである。このように、植物方言の命名の観点は、人々がどのようにかかわってきたかを物語る指標となるのではなかろうか」〔川名 一九八六 六七〕
- 17 中川は地域名称の多い木と少ない木を明確に比較しているわけではないが、薪炭材となる樹木については一定の見解を示している。薪炭材のうち「カシ類、コナラ、クヌギ、ウバメガシ」のような「広範囲にわたって共通な方言で呼ばれていることが多い」樹木に対して、リョウブやシデ類、クマノミズキ、カナグノキなど、単一的な名称をもたない樹木の性質として、①比較的小地域で消費される、②製品はもとの樹種の特性を高度にいかしたものではない、③比較的に付加価値の高いものでもないという三点が指摘できるという〔中川 一九八四 b 二〕。これはほとんど、削りかけに用いられる樹種の性質と読み替えることができる。
- 18 有菌によれば、ヒガンバナは「水田稲作農耕文化を構成する要素のひとつとして…縄文晩期に渡来した」ことが、現在の自生地などから推察できるという〔詳しくは 有菌 一九九八〕。
- 19 具体的には、形、生態、色、大きさや数、強さや固さなどの性質、花期や果期などによる命名である。このほかに利用による命名、遊びによる命名、味・有毒・臭いによる命名、渡来・分布による命名、言い伝えによる命名などが挙げられている。
- 20 山田孝子によれば、アイヌ語で植物の対象的属詞（「属詞＋基本名 A」＝植物名 B となる場合の属詞、オオヨモギに対するシロオオヨモギなど）として色が用いられる場合も、やはり「レタラ（白い）」「フレ（赤い）」の二通りが確認されるという〔山田孝子 一九九四 一三〇〕。
- 21 前田文夫は「色としての赤はいちばん目立つもの故、これに基づく植物の名は多い」とした上で、「色彩上の厳密なものではなくて、赤を中心にして一方は黄赤色へ、他方は紫色にまで及ぶ、むしろ多くは青（緑）や白との対象の上から比較的のものとして付けられているとみてよい」としている〔前田 一九九四 一一五〕。

- 22 遺跡からの出土は、はからずも人々の生活の傍らにあったことの傍証となる。たとえばすこし古いデータだが、山田昌久による「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」によれば、二五〇〇年以前の出土としてミズキ二十八遺跡（北陸中部一七、関東一〇、東北一）、ヤナギ属四十六例（中四国一、北陸中部一一、関東一〇、東北一、北海道二十三）、ニワトコ二例（中四国一、関東一〇、北海道一）、イヌビワ一例（九州沖縄）などが報告されている〔山田昌久 一九九三〕。
- 23 筆者が通う山形県の離島、飛島の法木集落では、薪炭材不足を解消するために、かつて（昭和初頭と推測される）成長の早いこの木を島に移植したという。いまでは不要となって道端に繁茂し、畑にまで進出してくるので「邪魔者みたいな扱い」だという（斎藤友一さん、昭和六年うまれ）。飛島では別名のニセアカシアで呼ばれる。
- 24 『木の大本科』によれば、これまで原産地は中国と考えられていたが中国には見られないという。韓国の鬱陵島（ウルルンド）では自生が知られている。一方、隠岐島や宮崎・大分両県の山中に野生状のものが知られており、西日本に本来自生していた可能性もあるという〔平井 一九九六 五七八〕。いずれにしろ、八九八年の『新撰字鏡』には「支利乃木」、九三一年の『倭名類聚抄』には「木里」の名があるといい、植栽の記録は古い〔岩槻 一九九八 一四二〕。
- 25 たとえば信州秋山郷ではサワグルミをヤマギリと呼び、夏の生業のひとつとしてこれでゲタを作ったという（福原直一さん、昭和四年）。
- 26 台帳には「竹」を含め、四五種の樹種が記録されている。斎藤ほどの樹種が「有用な樹種」で、どれが「そうでない樹種」に分類されるのかについて明確には記していないが、台帳には、漢字表記で記載された樹種と片仮名表記の樹種があり、凡そ前者が「標準名」（≒有用な樹種）、後者が「佐渡地方の方言名」（≒そうでない樹種）での記載と考えてよいと思われる。そのように区分し、それぞれの地域名称を『日本植物方言集成』から拾いあげると、標準名で呼ばれた樹種群は全国における地域名称の数の平均が四五・七種であるのに対し、片仮名表記の樹種群の地域名称の平均は七〇・三種（樹種名が確定されていない三種を含むと七四・八種）と二十五種近い開きがある。
- 27 『日本植物方言集成』では和名サカキの他に、イヌツゲ、コゴメウツギ、ソヨゴ、タブノキ、ハマヒサカキ、ヒサカキなど六種が「サカキ」名称を持つ樹種として報告されている。

